

二宮尊徳（にのみや そんとく）

1 二宮尊徳栢山に生まれる

二宮尊徳は、天明7年（1787）7月23日、相模国栢山村の二宮家の長男として生まれました。子ども時代は、酒匂川の大洪水で田畠が流失、両親が亡くなり、親戚に預けられるなど苦労の多い日々でした。

尊徳は両親の養育の恩に報いるため、寝る間も惜しんで農作業や勉学に励み、24歳の時、二宮家再興を果たします。

2 尊徳の活躍

その才能が小田原藩主大久保忠真に認められ、37歳の時に小田原藩下級役人として取り立て

られた尊徳は、小田原藩下野国桜町領の復興を依頼され、妻と息子を連れ桜町の陣屋に赴任しました。

尊徳は、着任以来、毎日すみずみまで村を見て回りその実情を把握し、具体的な復興計画を作成、実践しました。

天保13年（1842）、尊徳は幕府直属の役人に取り立てられます。以降、幕府直轄の土木工事や日光東照宮の領地の復興などに取り組みますが、安政3年（1856）、病のため70歳で亡くなります。その生涯で尊徳から復興についての手ほどきを受けた村は600を優に超えると言われています。



桜町陣屋跡
(栃木県真岡市)



二宮神社
(栃木県真岡市)

第30回全国報徳サミット秦野市大会を開催します！

二宮尊徳にゆかりがある「全国報徳研究市町村協議会」に加盟している17市町村が集まる「全国報徳サミット」が、市制施行70周年記念事業として、秦野市で開催されます。



とき	令和7年11月1日（土）
ところ	メタックス体育館はだの（秦野市総合体育館）メインアリーナ
内容	オープニングイベント、報徳学習発表や基調講演、参加首長のまちづくりパネルディスカッション、大会宣言など
主催	第30回全国報徳サミット秦野市大会実行委員会
共催	全国報徳研究市町村協議会、秦野市、秦野市教育委員会

詳細は下の二次元バーコードから市ホームページへアクセスしてご確認ください。



大会当日には、北幼稚園児、南・東・北小学校児童、東・北中学校生徒、秦野市合唱連盟、秦野ささら踊り保存会、学生団体E4などが出演予定です！



－報徳を広めた功労者－

安院庄七
と草山貞胤

第30回全国報徳サミット秦野市大会

安居院庄七（あぐい しょうしち）

1 安居院庄七蓑毛に生まれる

二宮尊徳の教えを遠州（現静岡県西部）に広めたことで知られる安居院庄七は、寛政元年（1789）、蓑毛村の御師の家密正院の次男として生まれ、後に曾屋村十日市場の米穀商安居院家に婿入りしました。

庄七は、米相場で失敗し多額の借金を抱え込み、低金利か無利息で金を貸してくれるという尊徳の噂を聞き、天保13年（1842）7月2日、尊徳の赴任先である野州桜町（現栃木県真岡市）を訪れました。庄七が54歳の時でした。

2 生まれ変わった安居院庄七

桜町の陣屋に滞在すること20日、尊徳は多忙で面会はできませんでしたが、庄七は部屋の外から尊徳の講話を立ち聞きしたり、門弟の話を聞いたりして、その教えを次第に理解し、感銘を受けました。

今までの自分を恥じ、郷里に帰った庄七は生まれ変わったつもりで報徳の教えを実践し、家計を立て直しました。そして弟の浅田勇次郎とともに旅に出て、大阪の社会奉仕活動家、杉澤作兵衛に出会い、活動に協力するようになります。



安居院庄七頌徳碑
(静岡県浜松市)



安居院庄七の墓
(静岡県浜松市玄忠寺)



大日本報徳社
(静岡県掛川市)



安居院庄七贈位記念碑
(秦野市立本町小学校)

庄七たちはこの活動のために東海道を行き来することが多かったのですが、立ち寄った浜松の下石田村で村の財政立て直しの相談を持ち掛けられます。

3 安居院庄七の遠州での軌跡

庄七は自分が学んだ報徳の教えを説き、弘化4年（1847）、遠州で初めての報徳の結社「下石田報徳社」が発足しました。この後も庄七の遠州での活動は継続され、嘉永6年（1853）には結社の数は32か村に達しました。この年、遠州の人たちから尊徳に直接面談したいという希望が出され、尊徳も自分の考えが正しく伝わっているかを確かめたいという考え方もあって、庄七と遠州報徳社の代表者7人は尊徳に会いに日光を訪れます。面談の結果、遠州報徳社の活動は尊徳から高く評価され、安居院庄七、遠州報徳社が名実ともに認められることになりました。

そして10年後の文久3年（1863）8月13日、浜松の門人宅で庄七は75歳の生涯を終えました。庄七の死後も遠州の報徳運動は高まり、明治44年（1911）には掛川に大日本報徳社が設立されるなどして、その遺志は受け継がれてきました。

草山貞胤（くさやま さだたね）

1 草山貞胤と秦野煙草

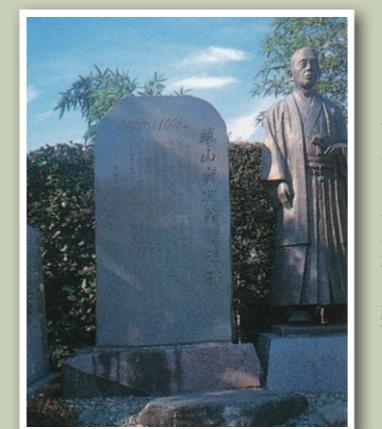
草山貞胤は、文政6年（1823）、平沢村に御嶽神社の神主の子として生まれました。

36歳の時、父の職務を受け継ぎ神職となります。その後、郷土の公益のために地場産業であった煙草耕作の改良にも熱心に取り組みました。

苗床を高くし、発酵熱で苗の成長を促進する「揚床」や苗を麦の畝の間に密に移植し生産量を挙げる「正条密植法」などの改良の結果、秦野煙草は農産物共進会、内国勧業博覧会等で優秀な成績を収め、その名声を高めました。



草山貞胤頌徳碑
(平沢御嶽神社)



草山貞胤頌徳碑
(出雲大社相模分祠)

2 草山貞胤と報徳

貞胤は51歳の明治6年（1873）頃から二宮尊徳の高弟、福住正兄から報徳を学ぶようになります。二人は明治24年（1891）に小田原に「報徳二宮神社」を作るための募金活動を開始、貞胤も自分の財産を処分し資金に充てるなど尽力しますが、福住は翌年に亡くなってしまいます。

明治26年（1893）、小田原城の隣に「報徳二宮神社」が完成すると貞胤は福住の遺言でこの神社の初代社掌となりました。貞胤71歳の時でした。社掌就任後は、神社に一人で居住し朝夕は神前に仕え、報徳の教えを忘れることなく、時間を見て各地を回り、道を講じ、業を勧めました。

— 報徳仕法とは —

報徳仕法とは二宮尊徳の教えに基づく農村の立て直しの方法のことです。その基本的な考え方は、「至誠」をもって「勤労」「分度」「推譲」を行うという考え方方が基本となっています。

至誠

真心をつくすことであり、尊徳の仕法や思想、そして生き方の全てを貫いている精神で、教えの全ての土台となっています。

勤労

一生懸命働くだけでなく、社会に役立つ成果を考えて働くことです。

分度

自分の立場や経済状況に合った生活を送ることです。

推譲

経済生活から生み出した余剰・余力の一部を他人や社会のために分かち与えるという教えです。

これらは、自分の利益や幸福を追求するだけでなく、家族や社会から受けている恩に感謝し、同時に生を授けてくれた大自然の摂理に報いる行動をとれば、社会のためになるばかりでなく、自分のためにもなるとされています。